

児童英語教育研究センター



Center for Teaching English to Children (CTEC)

児童英語修了卒業生による座談会開催！(後半)

前号に引き続き、児童英語教員養成課程を修了し、小学校教員として活躍する卒業生5名による座談会の様子をお届けします。後半では、「教採対策」「現在の状況」「現役学生へのメッセージ」について語っていただきました。現場でのリアルな声をぜひご覧ください。

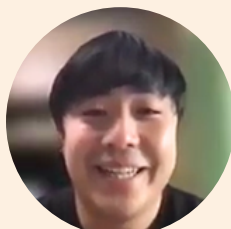
卒業生紹介



矢吹 光莉さん '23年度卒
福島県西郷村立米小学校
1年生担任



安藤 優那さん '23年度卒
さいたま市立日進小学校
外国語専科教員



金 永純さん '21年度卒
群馬国際アカデミー内定
現在千葉経済短大で
小学校教諭免許取得中



澤田 真菜さん '23年度卒
千葉県山手市立
おおぐろの森小学校
3年生担任



中山 順優喜さん '23年度卒
北海道北見市立高栄小学校
5年生担任

教採対策はどのようにしましたか？

安藤：さいたま市の教員採用試験は、集団面接・小論文・個人面接・英語ディスカッションなど、複数の試験で構成されています。ニュージーランド実習から帰国した3月末から教員採用試験用の参考書を購入し、情報収集や書類準備を始めました。4年生の4月末からは中高教職の授業が始まるため、4月の早い段階から面接対策に力を入れました。英語専科としての受験だったため、個人面接では専門性が問われることを意識し、河合先生や、中高教職のご担当で校長経験のある深山先生に志望動機を添削していただきました。また、本学を卒業後、さいたま市で英語専科教員や担任を経験されている先輩にも、空き時間を利用してZoomで面接練習をしていただきました。英語専科は、ディスカッションや面接が中心となる一方で、担任向けの一般試験が免除されています。そのため、英語能力や子どもを対象とした指導技術など、小学校外国語専科教員として求められる資質を意識しながら、面接練習と並行して参考書による筆記対策も行いました。なお、英語専科専用の筆記試験はなく、中高英語教員と同じ筆記試験を受験しました。

金：千葉県対策としては、まず教職教養の過去問から取り組み、試験全体の流れをつかみました。一方、私立校では教職教養試験がなく、英語面接と模擬授業が中心でした。群馬国際アカデミーでは、実際に学校に赴き、35名の小学4年生を対象に45分間の模擬授業を行うなど、実践力が問われました。模擬授業では、日本語で国語の授業を行い、「イメージ教育であっても母語を大切にする」という学校の教育理念を意識しました。詩の授業を通して、日本語表現の面白さや魅力を、子どもたちだけでなく後方で見ている面接官にも伝えることを心がけ、それが結果につながったのではないかと感じています。最終的に私立校を選んだのは、英語を教科として教えるだけでなく、英語を使いながら他教科を学び、日常生活の中で英語を身につけていくイメージ教育の環境に、教員として関われる点に大きな魅力を感じたからです。

先生：公立一本で教員採用試験を受けた3名の方は、その理由を教えてください。

澤田：まず、大学時代に参加した千葉県主催の小学校教員対象「英語絵本を活用した言語活動実践研修」で、実際に小学校で英語絵本の読み聞かせを実践したので、故郷の青森ではなくご縁の強い千葉県を選びました。千葉県の教員採用試験は一次と二次があり、一次は筆記試験と集団面接でした。筆記対策は、同じ参考書を何度も繰り返し解くことを大切にしました。また、短大で中山さんや矢吹さんと一緒に過ごすことが多く、内容を共有しながら勉強できたことが心強かったです。集団面接についても、短大で練習の機会を設けていただき、そこで対策を行いました。二次試験では河合先生に面接練習をしていただきました。話すことに苦手意識があったため、マインドマップを使って考えを整理しました。短大の仲間にも練習に付き合ってもらい、切磋琢磨しながら本番に臨みました。

矢吹：福島県の試験は、筆記や選択問題がほとんどなく、穴埋め形式が中心だったので、参考書を常に見返しながら、出そうなところや出そうな用語を何度も繰り返し読み、丸暗記する形で対策しました。二次試験については、まず面接練習を河合先生にいただきました。また、これまでに出版された質問をもとに、「自分だったらどう答えるか」をノートに書き出して整理しました。模擬授業はその場で課題が出され、20分間で内容を考えなければならなかったため、事前に十分な対策ができず不安もありました。そこで、どの教科でも必ずできることとして、板書の確認や机間指導の仕方など、「これは必ずやる」と自分の中で決めたポイントに絞って臨みました。ほとんどぶっつけ本番のような形でしたが、その中でできることを精一杯やりました。

中山：私は、北海道の宗谷管内から出ず、その地域のみで働く「地域枠」という特別な枠で受験しました。この枠では教職教養が免除される代わりにレポート提出があり、先生方に添削していただいたものを提出しました。教科については、対策本を購入してひたすら問題を解き、覚えることを中心に勉強しました。また、澤田さんや矢吹さんと一緒に問題を出し合いながら対策を進めました。実はあまり自信がなく、「だめでも大丈夫」という吹っ切れた気持ちで臨んだことが、結果的に緊張せずに受験できた理由だったのではないかと、今では思っています。一次試験がそのような形だったので、正直なところ「受かっている」とは思っていませんでした。二次試験についてもさっと練習した程度だったため合格の連絡を受けたときは本当に驚きました。「全然練習していないのにどうしよう」と焦り、河合先生や千葉経済短大の先生、そして澤田さんや矢吹さんたちと一緒に面接練習を重ねました。そのおかげで、最終的に何とか合格することができました。早いうちからできることは、何でもやっておくのが大事だと思います。私は一人で黙々と勉強するより、友達と話しながら進める方が頭に入りやすいタイプでした。「この時こんなこと言ってたよね」と会話ごと記憶に残るのも良かったです。一人で集中する時間も大切ですが、時には友達と息抜きしながら楽しく取り組むのもおすすめです。

現在の状況について教えてください

安藤：1年目は、何百人もの児童を評価する立場としてのプレッシャーが大きく、授業やクラブ活動、委員会、評価業務に加え、初任者研修での研究授業も重なり、1学期までは非常に厳しい日々が続きました。しかし、2学期以降は子どもたちの顔と名前が一致し、担任の先生方との連携も徐々にスムーズになりました。アルファベットジングルや絵本を使った活動など新しい取り組みにも挑戦できるようになり、2年目の現在は楽しさを感じられる場面が増えています。

また、埼玉市ではグローバル教育が進む一方で、フォニックスや音と文字の指導にはまだ課題があると感じています。ただ、現場の先生方はその点を意識し、歌や活動を工夫するなど前向きに取り組んでおり、英語専科として低学年の授業を担当する際には「こうした方法もありますよ」と提案することもあります。担任の先生との情報共有を大切に、チームとして子どもたちを支えながら、学校全体の英語教育をより良くしていきたいと考えています。

澤田：1年目は本当に大変でした。子どもと過ごす時間は楽しいのですが、それ以外の仕事は想像以上に多く、大学時代のように一つのことに時間をかける余裕がなくなりました。4月は体調を崩してしまったほどです。でも、学年の先生方や初任者指導の先生が親身に話を聞いてくださり、すぐ相談できる環境に救われました。「分からないことはすぐ聞く」を大切にして、何とか1学期を乗り越えられたと思います。

金：教材研究にもっと時間を使いたいの、評価や事務作業が次々とあり、思うようにできないことに葛藤があります。準備が不十分だと、子どもたちの反応にもすぐ表れてしまうので、「分かる楽しさ」を引き出せていないのでは、と悩むこともありました。群馬国際アカデミーでは、算数や理科なども英語で行うイマージョン教育を実践しています。最初から英語ができる子ばかりではありませんが、日常的に英語に触れることで、低学年のうちから自然に使えるようになります。採用では資格よりも実践力が重視され、面接や模擬授業を通して「英語で教えられるか」を見られました。英語力だけでなく、日本語での対応力やチームで働く力も求められていると感じています。

中山：私は今、5年生の担任ですが、子どもたちの存在に毎日元気をもらっています。何気ない会話や子どもたちの行動に笑わせてもらい、「人に恵まれているな」と感じる日々です。学年の先生も褒めて伸ばしてくれる方で、安心して楽しく働いています。一方で、外国語の授業をもっと工夫したいのに、他教科や事務作業で時間が取れないことは悩みです。「ここまででよし」と区切りをつけないければ授業が回らない現実も感じています。

矢吹：1年生担任になり、子どもたちも自分も学校生活が分からない状態からのスタートでした。教材研究の時間がほとんど取れず、「どう言えば伝わるのか」を授業中に必死で考える毎日です。それでも、学年の先生方がとてもフレンドリーで、真似しながら学ぶことで何とか乗り越えてきました。人数が少ない分、一人ひとりと丁寧に関われるのは良さだと感じています。

現役学生へのメッセージ

金：英語力は本当に大きな武器です。ただし、子どもに教えるための専門性は不可欠。児童英語を理論と実践の両面から学べる環境を、ぜひ大切にしてください。

安藤：児童英語で学んだことは、現場で本当に強みになります。迷っている人も、今の経験は必ず将来につながります。英語専科は今、とても必要とされています。

澤田：千葉県は研修が充実しており、学び続けたい人には魅力的な環境です。児童英語と教職、両方学んだ経験は現場で確実に活かしています。

中山：「ブラック」というイメージや「自分にできるか」という不安は、実際に現場に出てみると大きく変わりました。児童英語で積んだ経験が自信につながっています。大丈夫、どうにかになります。

矢吹：少しでも「やってみたい」と思ったら、ぜひ挑戦してほしいです。失敗を重ねながら経験を積み、必ず成長できます。

児童英語教員養成課程 予定

児童英語教員養成課程 ガイダンス（オンライン／対面 ※同内容）

※日程・開催方法の詳細は次号にてご案内します。（3月末～4月2回開催予定）

児童英語教員養成課程に興味のある方、本課程の履修を検討している学生向け

先輩学生による体験談紹介、個別相談を予定しています

※いずれか一回の参加で構いません。

ボランティア説明会 「いちご食堂」 ※日程・会場の詳細は次号にて告知予定(4月半ば開催予定)



[TEL] 043-273-1579

[E-mail] ctec-kuis@ml.kandagaigo.ac.jp

[URL]

<https://www.kandagaigo.ac.jp/kuis/main/labo/ctec/>